Kobe Shoin Women's University Repository
KARASHI-DANE

Hugh James Fossの新約聖書註釈と聖書翻訳

著者	荒井 章三
著者別名	Arai Shozo
雑誌名	キリスト教論藻
巻	37
ページ	25-50
発行年	2006-03-10
URL	http://doi.org/10.14946/00001607

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

Hugh James Foss の 新約聖書註釈と聖書翻訳

荒　井　章　三

I

「松蔭女子学院」の前身である「松蔭女学校」は、英国の宣教団体 Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts（以下 SPG と省略）から派遣されたヒュー・ジェイムス・フォス師（1848—1932）（彼の註釈書の著者名は、フヲス、あるいは、稀にフオスとなっているが、以下現行の表記法に従い「フォス」とのみ表記し、且つ、敬称も省略）によって、1892年に創立された。彼の生涯については、彼自身の回想録 "Memoirs of Hugh James Foss"(1) に詳しいが、ここでは、彼の神学的業績、とりわけ、彼の新約聖書の註釈書と聖書翻訳との関わりを取り上げることとしたい。註釈書は、いずれも日本で翻訳出版されたものばかりであるが、残念ながら、いわゆる原書の所在は分からない。『回想録』には、「新約聖書の注釈も何篇か準備した。注釈の場合には、私はまず英語で書き、日本人の助手と共同で注意深く翻訳を進めた。エペソ書、コロサイ書、ヘブル書と、ヨハネの手紙、ヤコブの手紙、ユダの手紙、ペテロの第二の手紙などの注釈だった。ペテロの第一の手紙の注釈はすでに他の人によって準備されていた。私の黙示録の注釈は、1923年９月１日に大震災が起こったときには、もう半分以上印刷されていた。しかし、震災のため、印刷用の原版も、日本語の原稿も、英語の原稿も壊滅的状態となった。その後５年近くは、再び同じ本を書き始めようと筆を執ることはなかった。1923年に英国に帰国してから注釈書の英文原稿をすこし翻訳出版のために送った。そのうち二、三編は採用され翻訳が着手されたが、出版されたという報せはまだない」（99頁以下）という記述があり、英語の原文は手書

きであって、それを元に著者と助手とが共同して翻訳し、直接日本語による註釈書が出版されたから、印刷された英語版はないと思われる[2]。

1．新約聖書註釈書の書誌

現在まで、新約聖書註釈書の翻訳出版が確認されているのは、8巻であるが、以下、出版順に、書誌を記しておこう。

『以弗所書註釋』（エペソ書）　著者名は、ヒユ、ゼームス、フヲスと表記されている（但し、奥付には、ヒユ、ゼ、フヲスとなっている。以下凡そ同じ）　松山高吉閲、松田承久・三島疆の共訳であり、明治42（1909）年12月15日印刷、同20日の発行で、発行所は当時、神戸市中山手通三丁目番外五番にあった聖公會出版社である。因みに当時、著者のフォスは神戸市下山手通五丁目十五番に住んでいた。扉に印刷されているように、SOCIETY FOR PROMOTING CHRISTIAN KNOWLEDGE（英国聖公會布教會社）の援助を受けて出版されている（写真A・B・C参照）。四六判（B6）、以下すべて同型であるので、記載しない。本文197頁、目次2頁の次に著者の「序」（明治42年10月下の2日）2頁あり。さらに21頁の「総論」あり。奥付には定価の記載がないが、コロサイ書に付された新刊広告には45銭と書かれている。表紙はモスグリーンの厚紙。以下同じであるが、コリント前書のみは、ダークブルーである。

『哥羅西書註釋　附　腓利門書註釋』（コロサイ書・ピレモン書）　吉田菊治郎訳で、大正元（1912）年10月（但し、奥付では、11月）発行、発行所は、エペソ書と同じである。本文166頁（内、コロサイ書130頁）、本文の前に、日本聖公會神学院校長・長老　今井壽道の「序」（大正元年10月）4頁、著者の「自序」（大正元年9月）2頁、「目次」2頁「総論」12頁あり。但し、ピレモン書の「総論」11頁は、総頁の中に組み込まれている。定価45銭。

『使徒ヨハネ諸書翰註釋』　吉田菊治郎訳で、大正4（1915）年7月発行、

発行所は同じである。本文271頁。「自序」（大正４年７月）４頁、「目次」２頁。「総論」「本文」は「第一書」（１―206頁）と「第二書・第三書」（207頁以下）に分れ、「総論」は、いずれも総頁の中に組み込まれている（以下同じ）。定価60銭。

『聖ヤコブ並ニ聖ユダ書翰註釋』 吉田菊治郎訳で、大正11（1922）年２月発行、発行所は、東京市京橋区竹川町17番地に移った日本聖公會出版社である。本文292頁（内　ヤコブ書225頁）、序文なし。定価１円70銭

『ヘブル書註釋』 吉田菊治郎訳で、大正13（1924）年５月発行、発行所は、麻布区霞町２番地に移った日本聖公會出版社である。
本文338頁、目次の前に、「序」（大正11年12月）３頁あり。１円70銭

『聖徒彼得前後書註釋』（ペテロ書）　吉田菊治郎訳で、大正13（1924）年５月発行、発行所は上と同じ。本文258頁（内　前書131頁）。扉裏の英文のタイトルでは、ペテロ前書の著者は、「回想録」に記されているように、フォスではなく、R.D.M.SHAW である。序文なし。定価記載なし。

『コリント前書註解』 著者名　ヒユ・ゼームス・フオスとなっている。吉田菊次郎（菊治郎の間違い？）訳で、昭和３（1928）年12月発行、発行所は「聖公會出版社」で、住所は、麻布区材木町24に移っている。本文292頁。序文なし。但し、次の『ロマ書註釋』と同様、表紙に英文のタイトルと著者名が記されている。扉裏の英文のタイトルなし。定価　１円80銭。現在手元にある版は、その他のすべての表紙の色がモスグリーンであるのに対し、ダークブルーであり、定価も旧定価の上に４円50銭と貼り付けてあるので、訳者名の間違い、扉裏の省略などを考え合わせると、数年を経て重版されたものであろうと推測される。ただし、本文は、紙質から見て、初版そのままのものが使われている。

『ロマ書』 著者名　ヒユ・ゼ・フヲス（但し、奥付はフオス）、吉田菊治郎訳で、昭和４（1929）年発行、発行所は「聖公會出版社」［但し、英文では、NIPPON SEIKOKWAI SHUPPANSHA（Church Publishing Society）］となっており、著者の肩書きが、「前大阪地方部監督・神学博士」（EX-BISHOP OF OSAKA）に変わっている。本文286頁。序文なし。定価１円80銭。

フォスが日本に滞在したのは、1876年８月から、関東大震災の直前1923年の６月までであったから、前に引用した文から推察するならば、最初の４巻は、彼の在日中に発行されたが、後の４巻は、帰国後に原稿を送ったものであろう。『ヨハネ黙示録』については、彼の記述どおり、震災で失われてしまったに違いない。『聖ヤコブ書』以降は、東京に移った日本聖公會出版社の発行になると同時に、SPCK の許可なしで発行されている。裏表紙の「日本聖公會出版社」と“Church Publishing Society”の頭文字 CPS を組み合わせたロゴからも、そのことが裏付けられる。

２．註釈書を書いた動機

さて、フォスは、後に述べるように、1910年以降、新約聖書の改訳に関わるのであるが、この改訳の完成以前に刊行された註釈書は、エペソ書とコロサイ書及びピレモン書、ヨハネ諸書簡のみである。このうち、コロサイ書及びピレモン書は、改訳作業が進められていた時期に書かれたと思われる。その点については、後述するが、まず、彼が何故に註釈の仕事を志したのかを知るために、エペソ書とコロサイ書の序文を書き移しておこう。

まず、『以弗所（エペソ）書註釋』の序文を記載する。なお、彼が著した註釈書は、すべてルビ付であり、序文もその例外ではないが、あまりにも煩瑣なので、読みにくい部分のみに付けておいた。本文通りの漢字を使ったのは、当時の雰囲気を味わってもらいたいからである。

序

今より数年前のことなりしが、篤志者の懇望、辞(いな)みがたくして、エペソ書に註釋することを諾し、當時(そのころ)起稿せしものから、事繁き身は心に任せず、思ひのほかに長日月を歴(へ)たり。その間に英國にては、此書の新註釋二三種類出版せられて世に公になれり。是(こ)以(も)て予は愈よこの書の重要なると、日本語の註釋の必用なると深く感じ、更に奮勵を加へて速かに成し了(をへ)んことを期したり。斯て註釋するに方(あた)り、屢次(しばしば)困難を覺えたるは、現譯聖書の往々原文に適合せざる所のある事なりき。然(され)ど予は現譯を難ずる者にあらず、多くの識者と共に之を賛稱し、之に始めて従事せられし、翻譯委員諸氏の精勵、公平、博識に感服する者なり。但しエペソ書の如きは書簡中尤も深き玄妙の意味の含まれたる者なれば、翻譯も亦隨って難し。この故にその意義を顕はさんとすれば、直譯に遠ざかるは自然の勢なり、敢えて咎むべきにあらず。然ど、之が為に聖書の中からこれ引證比較するには、甚だ不便を感じたれど、唯だ止を得ざる個所のみを改譯して、其他は勉めて現譯の句によりて註釋を試みたり。註し了りて省閲するに、猶ほ不完全なる點頗る多し。稿を棄て出版を罷(やめ)んか、然ずば更に研鑽推敲の丶ち世に出さんか、遅疑する所ありしかど、徒らに年をかさね、若くは中止して依頼者の志を空うするに忍びず、且は前諾に背くも心よき業ならねば、爰(ここ)に一向(ひたすら)全能者の祝福と聴許とを祈(ねぎ)求めて、印刷に附すること丶せり。願くは讀者諸君、この書の今の代に肝要なるを覺り、註釋は不完全なりとも堂に昇る手引きとなし、愈よ進んで室に入り、真理の奥を究め、之によりて忠信、仁愛、熱誠等の諸徳を増し加へられんことを

明治四十二年十月下の二日　　著　者　識す

聖書については、新約聖書が1879年（明治12年）、旧約聖書が1887年（明治20年）に完成していた（明治訳）のであるが、適当な註釈書は、ほとんど皆無という状況であった。そこで、フォスはまず、エペソ書から始めようとしたのだが、公務に時間を割かれ（「数年前から」という表現は曖昧だが、1905年前後と考えれば、1899年の主教就任後ということになる）、仕事の進

行は思うに任せなかったであろうことは明らかである。しかし、「この書の重要性、さらに、本国での新しい註釈書の出版などに後押しされて取り組んだのであるが、註釈作業を進めるにしたがって、現行聖書（明治訳）には、ギリシア語の原文に適合しないところがあり、作業上しばしば困難を感じた。もちろん、翻訳者の努力には頭が下がるとはいえ、パウロ書簡のなかでも、エペソ書のような意味深長な言葉を含む書の場合には、翻訳はとても困難を極める。そのため、現行聖書では、意味が通るように直訳を避けて、意訳になっている箇所が多い。それはそれで、仕方がないが、その結果、他の書簡との比較・引用する場合に非常に不便を感じた。その場合には、止むを得ない箇所に限って、自分の訳をつけておいた」というのが大体の意味するところであろう。

当時発行されていた英語による註釈書については、

Henry Alford (1810—1871): The Epistle to the Galatians, Ephesians, Philippians, Colossians, Thessalonians, to Timotheus, Titus, and Philemon : The Greek Testament : with a critically revised text, a digest of various readings, marginal references to verbal and idiomatic usage, prolegomena, and a critical and exegetical commentary, 1856, Deighton, Bell, Cambridge（『哥羅西書註釋　附　腓利門書註釋』の序文の中にオルフヲドと言及されている。）1880年重版

Charles J. Ellicott (1819—1905): "A Critical and Grammatical Commentary on St. Paul's Epistle to the Ephesians", 1855, W.F. Draper, London.（フォスの大学在学中に読んだ可能性がある。この書も『哥羅西書註釋　附　腓利門書註釋』の序文の中に言及されている。ギリシア語のテキストを各ページ上に掲げており、本格的な註釈書である。1863、1881年に重版。別に、翻訳として『基督教々要論』ハインド、木庭孫彦訳、1905年、日本聖公会出版社がある。

H.C.G. Moule (1841—1920): " The Epistle to the Ephesians, with introduction and notes", 1886, The Cambridge Bible for Schools and Colleges, Cambridge.

M.F. Sadler (1819—1895): "The Epistle of St. Paul to the Galatians, Ephesians, and Philippians with notes critical and practical", 1889, George Bell and Sons, London.　フォスが、『以弗所書註釋』の「総論」の中で、彼の名前を挙げて、

その所説をそのまま引用している箇所がある。

G. Currie Martin (1865—1937): "Ephesians, Colossians, Philemon, & Philippians, The Century Bible, 1902, T.C. & E.C.Jack, Edinburgh.

Brooke Foss Westcott (1825—1901): "Saint Paul's Epistle to the Ephesians : The Greek text with notes and appenda", 1906, Macmillan and Co. Limited, London. (Middle Name "Foss" については、「回想録」に面白い記述がある（16頁以下)。註釈書の翻訳はないが、『復活せる主の啓示』菅寅吉訳、1911年、普光社が出版されている。

Joseph B.Lightfoot(1828—1889): "Notes on the Epistle of St.Paul, 1875, Macmillan and Co., Limited, London. ギリシア語のテキスト付。註釈書の翻訳はないが、『基督教会教職論』村井義孝訳、1889年、教文館が出版されている。

なお、「英国改訂訳」Revised Version が、1885年に完成しており、彼も利用したと考えられる。因みに、改訳委員会では、参照されている。

次に、『哥羅西書註釋　附　腓利門書註釋』（コロサイ書・ピレモン書）の序文も書き写しておこう。

自序

此小冊子の目的は夫(か)の重要なる哥羅西書を研究せんと志ざす人々の手引たるにあり、此故に聖書の引用を數多くして載せたれば、讀者は宜しく煩を厭ふことなく一々對照比較して、本書簡の眞意を闡明し翫味するやう努めらるべし

著者は大概現譯日本聖書に従ひて註釋を加へたれども、唯其原意を現はすこと稍不明瞭なりと認むる個所のみ不完全ながら著者の改譯を掲げ、之に據りて註釋を施したり

聖パウロは本書翰に於て、先づ主イエス、キリストの圓満充足—萬民の有らゆる渴望を充たし有らゆる要求に應ずべき諸德満能を一身に完備し給ふこと、及び教會の首腦、光明(ひかり)の國の君主たる獨一無比の位に在まして、其教會

即ち光明の國を次第に全世界に擴張せしめ之によりて満民を神に歸順せしめ給ふことを力を極めて主張し、次に既に召されて光明の國に屬せる信徒たる者は皆暗黒の行爲を脱ぎ去り、心中に殘れる邪悪の性情を殺すにより

且つ聖靈の恩惠(めぐみ)を蒙り充分に之を用ひて其性質を改新し神の子供たるに適はしき生涯を送ることによりて神より受けたる召命預選を愈確保せざるべからざることを熱心に勸告せり、惟(おも)ふに此主張と勸告は實に二十世紀の吾人信徒に對して亦極めて剴切(がいせつ)緊要なる宣言にあらずや

本書は些々なる小冊子に過ず、其註釋は不完全なりと、雖(いえども)、冀(ねが)はくは讀者之を活用して此重要にして趣味多き書翰を研究し其中に存する聖パウロの眞正なる教訓を領得するに到らんことを、是余の熱心に望む所なり

終に臨み、著者は本註釋を作るに方(あた)り監督ライトフート氏、監督エリコット氏及びオールフヲド氏等の著書を丁寧に參照したり、依て茲(ここ)に之を附記す

大正元年九月　　著　者　識　す

ここでもフォスは、現行の聖書を基礎にしているが、ギリシア語原文の意味が不明瞭の場合には、彼自身の改訳を掲げて、それに従って註釈をした、と述べている。自分の訳を掲げている度合いは、エペソ書よりもコロサイ書のほうが、はるかに多いが、それは、エペソ書が、彼の関与した聖書改訳以前に書かれたのに対し、コロサイ書は次に述べる改訳の委員として関わっていたから、思い切って試訳ができたからであろう。その点については、後に詳しく検討する（Ⅲ参照)。

3．新約聖書改訳との関わり

では、次に、彼が従事した新約聖書の改訳について、彼の回想録から引用しておこう。

「後に、私はローマ・カトリック教会とロシア正教会を除くすべてのキリスト教団が使えるようにと、新約聖書を改定するために結成された委員会のメンバーに指名された。新しい改定の仕事でも、私たちが最初に翻訳したときに使った文体が新約聖書全体に採用された。・・・相当の熟慮と検討の結

果、外国人４人と、日本人４人が選ばれ、この仕事に携わることになった。・・・アメリカン・ボードのグリーン博士は、30年昔の最初の翻訳者の一人で再び委員に選ばれていたが、病身のためあまり仕事はできず、委員会が仕事に着手したあとすぐに亡くなられた。彼のあとは、同じアメリカン・ボードのラーニド博士が引き継いだ。彼は1875年に来日し、聖書諸篇の詳細な注釈書を数多く出版していた。私たちの教会からは私と松山氏が代表で出た。松山氏は、前述のとおり、最初の翻訳者たちの助手を務めた人である。・・・委員のうち二人はメソジストで、うち一人は日本生まれのアメリカ人で宣教師の息子だった。もう一人は日本人だった。バプティスト派のアメリカ人の宣教師もいた。バプティスト派はすでに彼ら独自の日本語訳を持っていたが、この企画に参加した。長老派の日本人も一人加わっていた。・・・７年の作業の後、1917年に全体がようやく出版されたが、新しい翻訳は広く一般に受け入れられたように思われた。・・・私自身としては、このような仕事に携わる機会を得たのは非常に光栄なことであった。私たち委員の唯一の目標は、ギリシア語の原文を正確に力強く、神学上の偏見を交えずに表現することであった」(105頁以下)。

この事業は、いわゆる明治訳聖書［1879（明治12）年完成］の改訂である「大正改訳新約聖書」のことを指している。『日本聖書協会一二五年史』によれば、「その後の国語の変化、思想の変転、また聖書学の進展などから、聖書の改訂を求める声が次第に大きくなった。1906（明治39）年、当時の諸教派の協力機関であった福音同盟会は、聖書改訂の決議をした。これを受けて聖書常置委員会は、三聖書会社［註　英国、北英国、米国］と共に改訂の具体化をはかり、改訂委員としてD.C.グリーン（委員長、後にD.W.ラーネッド)、藤井寅一、H.J.フォス、松山高吉、C.S.デビスン、別所梅之助、J.G.ダンロップ（後にC.K.ハーリントン)、川添万寿得を選んだ。1910年（明治43年)、改訳規定を定め、英国聖書協会発行のネストレのギリシア語原文校訂本に基づき、改訂英訳を参考として改訳を開始した。これを1917年（大正６年）に完了し、大正改訳『新約聖書』として初版を発行したのである。こ

の大正改訳は、原文に忠実であるとともに、その表現にも苦心が払われ、散文と詩文との区別を明らかにし、歴史的現在法を用いて学問的・文学的にも細心の注意が払われた」と簡潔に述べられている[3]。

それに対し『日本聖書協会一〇〇年史』には、より詳しい記述があるが、この記述は、海老澤有道『日本の聖書　聖書和訳の歴史』を基にして書かれているので、同書から引用しておきたい。「聖書常置委員会は、・・・1909年から翌年にかけて、グリーン J.C.Greene, ABCFM、藤井寅一（組合教会）、フォス H.J.Foss、松山高吉（聖公会）、デヴィスン C.S.Davison, MEFB、別所梅之助（メソジスト教会）、ダンロップ J.G.Dunlop, PN、川添万壽得（日本基督教会）ら内外各四名ずつを選んだ。また常置委員会は一月に改訳規定を協議、BFBS の発行したネストレ Eberhard Nestle のギリシャ原文校訂本に従い、特殊な章句についてはギリシャ語に通ずる委員の三分の二以上の同意によるとか、改正英訳の採った解釈に従い、新解釈は全委員の三分の二以上の賛成を要するとか、文体は敬語を適当な範囲で用い、むずかしくない時文（じぶん）体を採るなどの原則を定め[4]、1910年３月12日、神田の基督教青年会館に委員らが集まり、グリーンを委員長に挙げ、いよいよ事業を開始した。・・・翌４月13日から霊南坂教会牧師館、すなわち小崎弘道の書斎でマルコ福音書から着手した。５月に至るまでは委員宅を転々として会合するありさまであったが、・・・５月からは青山学院神学部の楼上の一室で、日曜日を除き毎日午前９時から午後４時まで委員らは訳業に従った。ダンロップは伝道のため辞任、ハーリントン C.K.Harrington, ABF がこれに代わった。こうして1911年１月25日、マルコ福音書の初稿ができあがり、推敲を経て、広く意見を徴するため試訳として６月に3000部を印刷配布、反響を待つことになった。・・・改訳委員会は、1911年（明治44年）１月下旬の総会において、ハーリントン・川添・別所はマタイ、グリーン・藤井はルカ、フォスと松山は京都にあってヨハネと、まず福音書の分担を決め、できあがった草稿は全委員が検討することに決めていた。・・・翌年はじめにマタイ、年末にルカ、そして1913年５月ヨハネ伝の訳稿が出来上がった。・・・1916年10月ヨハネ黙示録の訂正が完了。更に半年にわたり新約全部に検討を加え、1917年（大

正６年）２月、改訳の業を終え、10月５日に大正改訳の出版を見るに至った」と述べている[5]

このなかで重要な点は、フォスが松山高吉と「ヨハネ福音書」を担当したことの記述である。彼の回想録には、この点については触れられていない。しかも、この論考で対象としている「書簡」の分担について語られていないのも残念である[6]。ただ、同書によれば、改訳事業の前史として、聖公会の祈祷書の改訂事業にも触れていて、フォスとの関連で重要であるので、そのことについても引用しておきたい。

４．聖公会祈祷書の改訳との関わり

「聖公会は、公的祈祷書として、英美宣教師編『日本聖公会祷文』（1888年刊）を第一総会において仮採用と決定したが、その後・・・改訂を加え、1895年（明治28年）『日本聖公会祈祷書』を出版、翌年開催の第五総会はこれを正規のものとして受理・承認した。・・・さらに1902年開催の第七総会において、祈祷書中に収められる福音書・使徒書簡の改訂の議が決せられ、1905年（明治38年）５月の第八総会に中間報告がなされた。その報告文には、この改訳の経過が述べられているので、次に掲げておこう。

使徒書福音書改訳委員会報告

本委員ハ最初フヲス、チング、キング、木庭、水野、松山ノ六名ナリシニ水野氏辞シテ山県氏入リ、マタ暫クニシテ遠地ニ在リテハ取調困難ナリトテ、キング、山県氏辞シテ、チャプマン氏カ其候補トナリ今日ニ至レリ。本委員ラは第七総会ニ於テ前委員ノ報告シタル主意ニ従ヒテ改訳又ハ訂正ヲナシ、数次集会シテ之ヲ評定シ、其調査ヲ了ハリシモノハ復活日ヨリ漸次キリスト教週報ニ登載シテ公ニシタリ。然レドモ是レ完全ト見定メタルモノニアラザレバ、猶多少ノ修正ヲナスコトアルヘシ。今茲ニ最初ヨリ現時マデ調了シタルモノヲ見本トシテ諸氏ノ一覧ニ供ス。

使徒書・福音書　改訂委員

そして「使徒書・福音書　翻訳改正草案見本」として復活日の使徒書哥羅西書第三章一節―七節と福音書の約翰伝第二十章一節―十節を例示している。

そのヨハネ20・1—3を次に掲げる。

> 一周(まはり)のはじめの日、朝まだき暗きうちに、マグダラのマリア墓にきたりて、閉せる石の取除けありしを見る。すなはち走りゆき、シモン、ペテロ及びイエスの愛せし弟子のもとに至りて、誰か主を墓より取去れり、何処におきしか我ら知らず、といひければ、ペテロとかの弟子いでゝ墓にゆく。

この訳を一読して、それが大正の改訳に、きわめて似ていることがただちに知られるであろう。大正改訳においてヨハネ伝を担当したのはフォスと松山高吉であったから、当然と言えばそれまでであるが、大正改訳に至る前史として、この聖公会の改訳事業のもつ意義は無視すべからざるものと言わなければならない(7)。」

ちなみに「改訳聖書」の該当箇所を引用しておく。

> 一週(ひとまはり)のはじめの日、朝まだき暗きうちにマグダラのマリヤ、墓にきたりて墓より石の取除けあるを見る。乃ち走りゆき、シモン・ペテロとイエスの愛し給ひしかの弟子との許に到りて言ふ『たれか主を墓より取去れり、何處(いづこ)に置きしか我ら知らず』ペテロと、かの弟子といでて墓にゆく。

明治訳では、地名には二重線、人名には一重線が引かれていたので、聖公会祈祷書では、そのまま踏襲しているが、大正訳では、その両方が除かれており、また、総ルビとなっていて（上の例では、二箇所のみ付しておいた）点を除けば、訳文はほとんど同一と言っても良い。コロサイ書3章1—7節については、後述する（20頁以下）。

この祈祷書の改訳事業について、フォス自身「回想録」のなかで「私は日本語の祈祷書の翻訳委員にも指名されていた。これも骨が折れたが、楽しい仕事だった。私以外の外国人は、のちに北海道主教となったP.K.ファイソ

ン師とアメリカン・ミッションのT.S.ティング師の二人だった。ファイソン師は旧約聖書翻訳委員会の主要な委員であり、ティング師は素晴らしい独創的な翻訳手法を編み出していた。私たち三人にあと三人の日本人が加わり、I.J. 水野師が私の特別助手を務めてくれた。」(103頁)「私は使徒書と福音書の翻訳委員会にも身を置いていた。ティング師と松山氏の二人が主な協力者だった」(105頁) という記述がある。このうち、前者は、「祈祷書」そのものの改訂作業であって、何年にもわたって続けられた事業であり、その委員も、「回想録」のみに書かれた人だけでなく、しかも、幾つかの委員会に分かれていたようである。1) 祈祷文序文編集委員　今井壽道　山田清風　左乙女豊秋　2) 聖公会日課表改正委員　フォス　マキム　水野功　3) 祈祷文短縮等の諸議案調査委員　両監督 (ウイリアムス及びビカステス)　キング　田井正一　和気市作　山田助次郎　4) 祈祷文標準の保護者　ファイソン　牧岡鐵彌　中川藤四郎　5) 新祈祷文委員　フォス　マキム　寺澤久吉　木庭孫彦　6) 祈祷文文章改正委員　チング　ファイソン　水野功　山田清風　の諸氏が『日本聖公会祈祷書』の刊行に向けて選ばれた。

彼らの作成した草案を、1893年 (明治26年) の第四総会で選ばれた審査委員 (両監督、フオス、チング、今井、寺澤の4名と、文章改正委員らによって、審議され、1896年 (明治29年) に『日本聖公会祈祷書』として、発行された。その後、1915年 (大正4年) に、この改訂増補版が出版されたが、その翌年フォスは、改正祈祷書使用に関する司会者の心得という小冊子を出している[8]。

一方、「使徒書福音書改訳委員」は明治32年の第六総会において選出されていたが、第十二総会 (1917年、大正6年) に次のような報告をしている。

「使徒書福音書改訳委員は、・・・爾来その事業を継続して今日に到れり。・・・委員は此事業に着手するに臨み、先づ神の聖語の真理を表現するに適当なる文体をなさんには、単に現行訳に多少の訂正を加ふるのみにては尚不充分なるべきを認め、新たに改訳を試むることに決定し、之に従事すること数年終に明治44年第十総会に其成案全部を報告するを得たり。然れども該総会は、祈祷書改正案と共に、此改訳案の討議をも延期したりき。此の間

他方に於いて各派共同にて新約全書改訳の事業企てられ、我が委員中の二人も委嘱を受けて之に参加することとなり、第十一総会に於いて使徒書福音書の問題は、共同改訳の成るまで待つ事となせり。然るに共同改訳委員は、今や既に其事業を完了したるにより、我等使徒書福音書改訳委員は右の改訳文に従ひ、茲に此報告案を編製して提出するに至れり。

此文体は、前に我が改訳委員が最も適当と認めて取りし所にして共同改訳委員も亦之を採用したるなり。その訳文は、現行のものに比すれば一層正確にしてその用語も亦一層恭謹にして、神の聖語の与ふる神聖崇高なる教訓に能く適合することを信ず。・・・委員は又旧約聖書よりの日課に就ても、其意義を正確にし文体を斉しくせんがために、現行訳に多少の改竄を加へたり。願わくは本総会に於て此報告案を可決し、普く日本聖公会に用いられんことを(9)」

これを読めば、聖公會の改譯事業は、明治44（1911）年には完成していたのであるが、祈祷書に採用されることなく、幻の書として、お蔵入りになってしまったことが分かる。第十総會［1911年］の委員報告として「我ラ委員ハ爾来ソノ任務ニ背カザランコトヲ欲シ、各々多忙ナルニモ係ラズ、・・・・努力シテ稍々ニ歩ヲ進メタリシニ、第九総會ノ期近キ頃、偶々全聖書改譯ノ風説盛ンニ伝ヘラレ、既ニ着手セリトサヘ聞コエタレバ一旦ハ此事業ヲ停止セント思ヘリ、然レド第九総會ノ議決ニヨリテ更ニ継続スベキヲ命ゼラレ、復孜々トシテ勤メ来リ、遂ニ結了スルヲ得タレバ、茲ニ之ヲ第十総會ニ提出スルコトトナレリ。・・・本委員中二名ノ者ハ今般更ニ成立シタル聖書改譯事業ノ為ニ選抜セラレテ、其委員ノ数ニ加エラレタリ。仄カニ聞ク、全聖書改譯事業ノ始ルニ方リ我ガ委員ラノ改訳セシ所ノモノ、其ノ参考ニナリテ之ニ裨益ヲ予エ、又ソノ文體ニ模型ヲ示シタリトゾ。我ラ委員ハ第十総會ガ我ラ委員ノ労苦ノ結果ナル使徒書福音書改譯草案ヲ審査シ、之ガ採否ヲ決定センコトヲ希望ス。」さらに，第十一総會［1914年］の同委員会で「本委員等ハ前総会ニ報告セシ改譯草案ヲ参考ニ供スル為聖書改譯委員ニ送レリ聞ク所ニヨレバ聖書改譯委員ハ之ヲ参考シツツアリトノ事ナリ是以上報告スルノ材料ヲ有セズ」とあり、彼等の事業は、同時進行していた共同改訳委員会に引

き継がれ、なおかつ、そこで大きな役割を果たしたことを知ることができる。とりわけ、フォスの果たした役割は、きわめて大きかったと言わざるを得ない。

Ⅱ

ここで、彼の「回想録」によって、彼の略歴を述べておこう。

彼は、1848年6月25日にカンタベリー近郊のストリート・エンドに生まれた。カンタベリーの私塾で学んだあと、1860年マールバラ校の4年次に編入した。この学校は、現在も存在しており、当時は、オックスフォード大学への進学校として有名であった。彼もまたオックスフォードへの進学を目指したが、叶わず、1868年1月ケンブリッジ大学のクライスト・カレッジに入学した。卒業（1872年）後、彼は、カナダの大学での古典の教授に推薦を断り、牧会への道を選ぶ。リヴァプールの聖バルナバ教会の副牧師に就任したあと、チェスターの聖ミカエル教会（1880年彼によって神戸に建てられた聖ミカエル教会は、この教会に因んで名付けられた）と聖オレイブ教会を管理する伝道区に移るが、1875年11月14日、外国で宣教活動している人々のための祈祷会に出かける途中で、「日本に行こう」という考えがひらめき、SPGに外国伝道の希望を申し出、面接の後、1876年7月6日にリバプールを出航し、ニューヨーク経由で、8月26日に横浜に入港、しばらく東京に滞在後、9月21日に神戸港に到着している。彼が28歳のときである。それから、1923年6月まで、途中、何回かの帰国、その一回は、1899年大阪の主教に聖別されるための帰国もあるが（このときケンブリッジ大学から名誉神学博士を授与された)、およそ47年にわたって日本での布教活動に従事したのである。彼は「1923年、最初の二人の日本人の主教［元田作之進と名出保太郎主教］が選出された第15回総会の直後に、同僚の主教たちとも十分に相談したあと、私は主教職を辞し、カナダ郵船会社の船に乗って妻とともにイギリスに帰国した。ただ荷物は、一部を梱包した程度でそのほとんどを日本に残していた。数ヵ月後には日本に戻ってきて東京近辺に住み、文筆活動に従事したいと思っていたからである。しかし、関東大震災の壊滅的な被災のあと聖書協会が新しい

仕事に乗り出すことがほぼ見込み薄となり、私の日本での使命も終わったように思われたので、私たちはイギリスでの生活に本腰を入れることにした。・・・ただ、翻訳さえすれば日本聖公会で使用できるように英語の聖書註釈を用意するなどして、日本とのつながりを保つように努めた」と『回想録』の最後を締め括っており、彼の日本に対する学問的寄与への意欲はきわめて大きかったと言わざるを得ない。このことは、第三者の言葉からも知ることができる。『哥羅西書註釋　附　腓利門書註釋』には、日本聖公会神学院校長　長老　今井壽道の「序」が付けられている。

そのなかで、今井壽道は「著者は我邦に來教せられてより斯に三十有餘年、我が民情國俗に通暁し、教界細大の事情を知悉するのみならず、其の詩材文想は夙に我が國風の趣味を楽しみ、時に感興来るあれば自ら三十一文字を聯らぬる事あり、而して加ふるに古典學上の智識と聖書改譯事業に久しく盡瘁しつつある経験とを以てす、「聖書ハ日本人によりて日本人の為に解釋されざる可らず」と主張する余の如きも、平生著者其人に對してハ日本人を兼ねたる英國人として之を賞賛し、高徳博學の師として尊崇する心を禁ずること能ハざる者なるが故に、焉んぞ曩に以弗所書註釋を歡迎したる心を以て更に本著の上梓を感謝せざるを得んや」と、フォスの日本語力はもとより、日本文化に対する造詣の深さを賞賛している。「日本人を兼ねたる英國人」とは最高の賛辞であろう。

「回想録」のなかには、もちろん学生生活について述べているが、クラブ活動については、かなり多く語っている。「個人競技であるテニス以外は、カレッジのクラブの全部に参加することにし、まず手始めにコーラスで歌い始めたが、きっとはた迷惑だったろうと思う」と述べているが、後に彼が日本の主教に推薦されたとき、自分が難聴であるので、かなりの抵抗を感じたと記しており（66頁）、また、主教辞任の理由に難聴を挙げているから（108頁）、大学入学当時すでに難聴であったかどうか、明らかではないが、彼のコーラス部での活動は短期間であった。しかし、彼は、チャペルの無給聖歌隊、弁論部に所属した。大学の祈祷会にも入り、委員として活躍したようである。（ここでは、後に日本の二人目の主教となったエドワード・ビカステ

スと面識をもった)。スポーツでは、クリケット、ボート、サッカー、中距離走、競歩など、万能であったようである。

それに対し、学業については、それほど詳しく語っていない。1871年まず古典の学位をとり、翌72年神学の学位を得た。彼は「特にヘブライ語の熟達度については、賞賛の星印が付けられていた」(16頁)と書いているが、残念ながら、その当時の旧約学の講義がどのようなものであったかについては述べていない。彼が後に日本で旧約聖書の改訳の委員に選ばれたのは、このような彼のヘブライ語の素養が買われたからであろう。新約については「学生たちに評判の高かった講義には、ピール博士の古典のほかに、ライトフット教授の聖パウロの書簡に関する講義、ウェストコット教授のヨハネの福音書に関する私的講義があった」と簡単に述べているのみである(16頁)。しかし、このライトフット(J.B.Lightfoot, 1828—89)、ウェストコット(B.F. Westcott, 1825—1901)、これにホート(F.J.A.Hort, 1828—92)を加えた3教授は、ケンブリッジ大学、否、英国を代表する聖書神学者であった。当時、キリスト教界は、1859年に刊行されたダーウィンの『種の起源』が契機となって、信仰と科学とをめぐって大論争が起き、混乱をきわめていたが、この混乱からキリスト教界を立ちなおさせたのは、実にこの三人の聖書学者であったのである。彼らは、ドイツの聖書批評学の成果を取り入れた新しい註解書の刊行をとおして、信仰と学問とを調和させる方向を指し示したのである。そのような教授に学んだことは、フォスに大きな影響を与えたことは疑いえないであろう。

Ⅲ

さて、彼の註釈書をもとに、聖書本文の翻訳について考察していきたい。最初の註釈書『エペソ書』は、前にも述べたように、1909年に発行されており、原稿は、彼が改訳委員としてヨハネ伝の訳業に携わる以前に完成していたことは明らかである。その作業のなかで、「序」から察せられる明治訳に対する不満が顕になり、彼を改訳委員への道を歩ましめたのかもしれない。

本文の註釈に入る前に、21頁にわたる「総論」がおかれている。「この書

簡の作者」「どこの教会に向けて書かれたのか」「パウロがこの書簡を書いた目的」「エペソとパウロとの関係」「エペソ書の概略」の５項目が含まれている。この総論は、他の註釈書にもおおよそ共通する。

では、フォスが現行聖書の本文をどのように改訳したのか、具体的に見てみよう。

エペソ書の場合もその他の註釈書の場合も、現行聖書を一節ずつ掲げ、それに註釈を加えていくのであるが、本文が不満なときには、現行聖書の横に、「改譯」と書いて、自分の訳を併記している。

『以弗所書註釋』では、明らかに「改譯」が掲げられている箇所は、９箇所にすぎないが、その他に、註釈の欄で、このように改めるべきだという指摘がなされている箇所が、数箇所ある。以下、順次、具体的に考察しよう。

１・１

「神の旨に由てイエス・キリストの使徒となれるパウロエペソにある聖徒およびキリスト・イエスに在て信ずる者に書を贈る[10]」

〔聖徒〕キリスト・イエスに在て信ずる者を指す（聖徒の下の及びの二字は誤りなり除く方よし）・・・・

〔キリスト・イエスに在て〕かれらはキリストと一致して、信者の有する凡ての安全を得るが故に常に如此いへり　（書を贈る）　原文には此語なし。英文は受信者の名を先にシ発信者の名を書の終りに記し、和文は双方の名を書の終りに記せども希臘語の風は双方の名を其書の始めに記すなり

ここでは、フォスがギリシア語のテキストにいかに忠実であるかが伺われると同時に、手紙の宛名の書き方の違いの指摘から、この註釈書が日本人のために書かれていることが、明らかとなる。

１・４

「それ神われらをして其前に潔く疵なからしめん為に世の基を置ざりし先より我らをキリストの中に簡び」

五節なる愛を以てといふ語は原語の意を味ふに此節中に入るる方至當なるが如く思はる

〔神われらをして愛を以て潔く疵なからしめん〕

大正譯では、「或は四の「潔く」の下を「疵なく愛にをらしめん為に」と譯し、五なる「愛をもて」を除く」という欄外註をつけている。

1・15

「是故にわれも汝らが主イエスを信ずることと諸(すべて)の聖徒を愛することを聞て」

改譯　「是故に我も主イエスに在る汝等の信仰と諸(すべて)の聖徒に対する愛を聞て」

これは使徒パウロが獄中に在てエパフラスその他の信徒より、エペソ人の近況を伝聞し、かれらの愛との進歩せしことに感じていへるなり故に旧譯は原文の意をあらはすに不充分なる憾みあり（序文を参看せよ）

大正譯「この故に我も汝らが主イエスに対する信仰と凡ての聖徒に対する愛とを聞きて」

2・2　省略

3・11

「此は神世々の先より定めたまひし旨に循へるなり、この旨は我らの主キリスト・イエスに由て成就せり」

改譯　「此は世々の光より我らの主キリスト・イエスに由て定めたまひし聖旨に循へりなり」

〔此は世々の先より・・・・聖旨に循へるなり〕　原書には成就の語なし故に省く而して其意は神は歴世の先即ち太初より・・・・

珍しく、ここには誤植がある。「世々の先より」を「世々の光より」と「先」と「光」とを間違えている。

註釈の箇所では正しく「先」となっているから、単なる誤植であろう。

3・14

「此に縁りて我らの主イエス・キリストの父、即ち天と地に在る諸族がかれ

に由て名を得し者の父に跪きて」

改譯　「此故に我は天にあり地にある全家族のその名を得る父の前にひざまづきて」

今の譯文には父の上にわれらの主イエス・キリストのといふ句あれども確かなる古代の寫本に見えざれば之を省きて改譯す

大正譯「この故に我は天と地とに在る諸族の名の起るところの父に跪づきて」

「諸族」に「或は「全家」と譯す」という欄外注がつけられている。

3・18—19、5・13省略

5・15

「然ば汝等つつしみて行を堅くすべし、智らざる者のごとくせず智者の如くし」

改譯　「なんじら心して其歩を慎め、智らざる云々」

本書の中に歩の字を用ふること此節とともに七回に及ぶ［引用箇所省略　筆者］原書歩とあるを現譯多くは行の字を當たり、歩を慎むことの緊要にして重をおけるを知るべし」

大正譯「されば慎みてその歩むところに心せよ、智からぬ者の如くせず、智き者の如くし」

5・16、18　省略

以上の点から『エペソ書』について言えることは、フォスが、明らかにこの書の註釈に重点を置いたことである。彼の改訳の箇所が、エペソ書全体155節のうちの9節に過ぎないことを見れば、彼が、明治訳の改訳を目指していたとは考えられないであろう。したがって、大正訳との関係について云々することはできない。

『コロサイ書』についての詳しい考察は、稿を改めるほかはないが、『エペソ書』に比べて、ほとんど、各節ごとに「改譯」が掲げられている。しかしながら、一見したところ、それが、そのまま『大正譯』に採用されている箇

所が多いとは思えない。先ほど述べた「使徒書・福音書　翻訳改正草案見本」が第八総会に提出されたのは1905年であるが、その訳文は次のようになっている。

「汝等キリストと丶もに甦らされたれば、上に在るものを求めよ。キリスト彼處にて神の右に座し給ふなり。汝等上にあるものを思へ、地にあるものを思ふな、汝等はさきに死たり、斯てその生命はキリストと丶に神のうちに蔵れあるなり。我等の生命なるキリストの現れ給ふとき、汝らも栄光をもて共に現れん。この故に、汝ら地にある體の肢なる淫行(いんこう)、汚穢(けがれ)、悪情、邪慾、および貪婪(むさぼり)を殺せ、むさぼりは偶像につかふると殊なることなし。これらの事によりて、神の怒は反逆の子に臨むなり。汝らも前にそのなかに、生存(ながらひ)しときは、同くこれを行へり。」

これに対し、1912年に出版されているフォスの『哥羅西書註釋』の訳文は、下記の通りである。

「爾曹(なんじら)キリストと偕に甦らせられたれば、上にあるものを求めよ、キリスト彼處にて神の右に座し給ふなり。上にあるものを念へ、地にあるものを念ふな、爾等は前に死にたり、斯て其生命はキリストと偕に神の中に蔵れあるなり。我等の生命なるキリストの顕れ給ふとき、爾等も栄光をもて偕に顕はれん。是故に爾等地にある體の肢なる淫行汚穢邪情悪慾及慳貪(むさぼり)を殺せ、慳貪(むさぼり)は偶像に事(つか)ふると異なることなし。此等の事に由りて、神の怒叛逆の子に臨むなり。爾等も曩に其中にながらひし時は、同じく之を行へり」

次の大正訳に比べると、明らかにフォス訳は、面倒を避けて、明治訳は掲げなかったが、明治訳に近く、「改正草案」のほうが「大正訳」に近い。したがって、彼の註釈書の原稿は、1905年の「翻訳改正草案」以前に完成していたものと考えられる。

汝等もしキリスと共に甦へらせられしならば、上にあるものを求めよ、

キリスト彼處に在りて神の右に座し給ふなり。汝ら上にあるものを念ひ、地に在るものを念ふな、汝らは死にたる者にして其の生命はキリストと丶もに神の中に隠れ在ればなり。我らの生命なるキリストの現れ給ふとき、汝らも之と丶もに栄光のうちに現れん。されば地にある肢體、すなはち淫行・汚穢(けがれ)・情慾・悪慾、また慳貪(むさぼり)を殺せ、慳貪(むさぼり)は偶像崇拝なり。神の怒は、これらの事によりて不従順の子らに来るなり。汝らも斯る人の中に日を送りし時は、これらの悪しき事に歩めり。

したがって、コロサイ書での彼の改訳は、そのまま大正訳には生かされることはなかったという結論に達せざるを得ない。「コロサイ書」に付されている「ピレモン書」の場合には、ほとんどフォスによる改訳が記されておらず、明治訳がそのままテキストとして用いられていることからも、出版年の順序にもかかわらず、「改正草案」よりも古いと断ぜざるを得ない。それよりは、むしろ、ヨハネ福音書と関係のある『使徒ヨハネ諸書翰註釋』を検討するほうが良いかもしれない。「ヨハネの第一の書」１章４節以下のみを掲げておく。

改譯　「此等の事を書き贈るは我らの喜悦を充しめんとてなり。我ら彼より聞きて亦なんぢらに傳ふる音信(おとづれ)は是なり、即ち神は光にして少しの暗き所なし。我らもし神と同心(とも)なりと言ひて暗を歩まば我等は謊(いつわ)りて真理(まこと)を行はざるなり。

大正譯「此等のことを書き贈るは、我らの喜悦の満ちん為なり。我らが彼より聞きて、また汝らに告ぐる音信は是なり。即ち神は光にして少しの暗き所なし。もし神と交際ありと言ひて暗きうちを歩まば、我ら偽りて真理(まこと)を行はざるなり。」

この一例をもって、全体を論じることは避けねばならないが、両訳の親近性を推察することは容易であろう。おそらく、この書簡に関しては、フォスが関与した可能性は高いと考えられる。

以上、見てきたところから、彼が松山幸吉とともに「ヨハネ福音書」の大正訳に関わったことは、資料的に見て明らかであるが、書簡に関しては、どの書簡の翻訳を担当したのかは、分からない。しかしながら、彼が、日本人のために新しい聖書の訳を試み、さらに、その註釈を刊行したことは、記憶されるべきだと考える。たしかに、彼の先輩の学者たちが書いた本格的な註釈書のように、ギリシア語のテキストも掲げず、きわめて簡便なものであることは、否定できないが、日本人のために、公務の多忙さにもかかわらず、多くの註釈書を著したことは、日本の教会にとって大きな足跡である。そして、その足跡の第一歩は、彼がカナダの大学の古典学教授への誘いを受けず、「日本に行こう」と閃いた若き日の朝にあるのではないだろうか。

註

(1) "Memoirs of Hugh James Foss" 1994年 『松蔭女子学院史料』第1集（英文）、本論ではその翻訳『ヒュー・ジェイムズ・フォス 回想録』1995年 『松蔭女子学院史料』第2集を使用した。この回想録は出版されることなく、家族の間でのみ愛読されていたタイプ打ちの原稿であり、何時、書かれたものか判明しないが、文中に「彼は現在（1929年）にいたるまで」(51頁)「現在（1929年）では」(97頁）という表現があるので、彼の死（1932年）の数年前であることは明らかである。しかし、この回想は、きわめて詳細であり、長年にわたって、書きためられていた可能性もある。

(2) 2004年度、フォスが学んだケンブリッジ大学で研究活動をされていた本大学の山田道夫教授に、大学図書館や古書店での探索を依頼したが、その他の書を含めて、彼による著書は皆無とのことであった。

(3) 『日本聖書協会一二五年史』（日本聖書協会、2001年）の記載順に彼らの略歴を掲げておこう（但し、フォスは除く)。『日本キリスト教歴史事典』『キリスト教事典』による。

D.C.Greene（1843—1913）アメリカン・ボード最初の宣教師として1869（明治2年）来日、74年 摂津第一公会を設立。同年聖書翻訳委員となって横浜に移り、新約聖書の翻訳に従事（80年完成)、81年より同志社英学校教授。90年より東京に定住して、葉山で没す。

D.W.Learned（1848—1943） アメリカン・ボード宣教師 1875（明治8）年 来日 草創期の同志社の教育に尽力。1928年帰国。1886—1908年にわたって、新約聖書全巻の注解書を刊行。全巻のものとしては最古である。

藤井寅一 1870（明治3）年—1917（大正7）年 熊本生まれ 大阪三一神学校に学

び、聖公会の牧師であったが、新神学の影響を受けて、教職に転じる。1889(明治22)年より、長崎鎮西学院、大阪桃山高等英語学校、同志社などで、主として、国漢の教師を務めた。ギリシア語にも堪能で、委員にえらばれた。12年九州学院に招かれた。

松山高吉　1847（弘化３）年—1935年　新潟県生まれ　1874年　摂津第一公会　神戸教会　の初代受洗者　同教会の牧師　80—84年を初め、平安教会、同志社の社長代理（1906—07）を勤めた。この間、神戸女学院、同志社、平安女学院（1896—1909）で教師を務めた。平安女学院に就任した際、聖公会に転会。聖公会の「古今聖歌集」(1900—01)「改訂古今聖歌集」(1914—22)、「聖公会祈祷書」(1899)にも参加。「新約聖書」（1874—79）「旧約聖書」（1884—87）にも参加している。

C.S.Davison（1877—1920）　アメリカ・メソジスト監督教会最初の宣教師　J.C. Devison の長男として長崎に生まれ、後1903—18年日本で奉仕した。

別所梅之助（1871—1945）東京生まれ。青山学院神学部卒業後、メソジスト教会の牧師として、豊岡、川越で伝道。後に青山学院教授。讃美歌の編集にも参加している。

J.Dunlop（1867—1932）　カナダ出身、1885（明治18）年来日　日本メソジスト教会（カナダ・メソジスト教会）に属し、長野、静岡、東京・本郷中央会堂、高田、金沢、福井、津で伝道、軽井沢で死去。

C.K.Harrington（1858—1920）　アメリカ・バプテスト教会宣教師　1886（明治19）年来日。横浜バプテスト神学校（関東学院）の旧約学教授1911—16年改訳委員、完成後16年に帰国。

川添万寿得　1870—1938　高知県生まれ　明治学院神学部卒業後　長野佐久で伝道、1902—05年オーバン神学校に留学。帰国後、東京（この間、「福音新報」の編集に関与し、植村正久に師事）長崎、大阪で牧会。17年から青山教会の牧師。明治学院神学部長、日本神学校校長兼教授。

(4)　原則がいかなるものであったか、松山高吉の『聖書改訳につき卑見』という覚え書を掲げておく。田中豊次郎著『聖書和訳の話』からの引用として『日本聖書協会一〇〇年史』（日本聖書協会、1975年）に記されている。83頁以下。

一、文体は平易通俗ニシテ口語ニ近カラシムル事

一、用語ハ新旧ヲ問ハズ広ク通ジ易キヲトリ而モ卑シカラヌ者ヲ択ブ事　漢語タリトモ一般ニ知ラレタル者ニシテ卑シカラズ、稜々シカラヌハ用ヰテ可ナルベシ、邦語ノ通ジ難キ死語ヨリハ中々ニ勝ラン

一、文章言辞ハ勉メテ普通平易ヲ取リ、佶屈贅牙ヲ避クト雖モ鄙俗ニ陥ラズ正確ヲ失ハズシテ荘厳ヲ保ツコト

一、神及ビ基督ニハ敬語ヲ用ヒ、其他モ詞遣ニ意ヲ用ヰテ、オノズカラ尊卑正邪読ム者聞ク者ニ弁ヘシムル事

一、かれ、なんじ等ノ代名詞ハナルベク略シ、殊ニ至尊ニ対シテハ之ニ代ルニ別ニ敬意ヲ失ハザル語ヲ用ヰル事

一、訳語ニアラズシテ翻訳タルベク、日本語ノ他国文ナラズシテ日本語ノ日本文タル

ベキ事

一、地ノ文ト対話ト詞ト引用トヲ区別シ且ツ讃辞歌詞ハ其体ヲ存シテ其趣ヲアラハス事

一、同一ノ原語ハ止ムヲ得ザル場合ノ他ハ訳語ヲ同一ニスル事

一、挿入スル漢字ハ世間流布ノ者ヲ用ヰ字カクノ少ナキ方ヲ取リ且ツ邦語ノ意ヲ一層明カニスル場合ニ加フル事

○すでに即、已○すなはち則、之、即○かつて曽、嘗○かわる変、化、易、代○かへる還、返○かへりて（かへつて）却、返○ゆるす赦、許、釈、恕○えらぶ撰、選、択、ノ類

一、文法、語格、仮名遣と、漢字字音ニ至ルマデ正確ニスル事

(5) 海老澤有道『日本の聖書　聖書和訳の歴史』新訂増補版　日本基督教団出版局　1981年、386ページ以下参照。

(6) 門脇清・大柴恒『門脇文庫　日本語聖書翻訳史』新教出版社、1983年によれば、福音書のほかについては、使徒行伝、テサロニケ前後書、ガラテヤ書、コリント前書、コリント後書、ロマ書、エペソ書、ピリピ書、コロサイ書、ピレモン書、テモテ前後書、テトス書、ヘブル書、ヤコブ書、ペテロ前後書、ユダ書、ヨハネ書、ヨハネ黙示録の順序で行われたという（208頁）

(7) 海老澤有道　同上書　380頁以下参照

(8) 若月麻須美『祈祷書の歴史及び内容』昭和13（1938）年、聖公会出版社、82頁以下

(9) 同上書　100頁以下
ちなみに、聖公会では、各主日の特祷のあとに、その主日に指定されている使徒書と福音書とが読まれる。旧来の祈祷書（明治28年版、大正４年版）では、その指定箇所のみが、書かれていて、聖書本文は記されていない。司式者は、大正13年刊の改訂増補祈祷書以前には、明治訳を読んでいたものと思われる。「使徒書・福音書改訂委員会」は、これらの箇所の翻訳に関わったのである。ところで、聖書本文が祈祷書に挿入されたのは、前述の改訂増補版以降であり、しかも、大正訳が採用されている。

(10) 実際の『新約全書』（明治15年版）の書体とは異なっている。写真Ｄを参照してもらいたい。

なお、本稿の執筆にあたっては、西南学院大学図書館、立教大学図書館、聖公会神学院図書館、日本聖書協会・聖書図書館、国際日本文化研究センター、日本聖公会・文書保管委員会の諫山禎一郎氏、ウイリアムズ神学館・校長の吉田雅人司祭の資料提供・助言を頂いた。心からの感謝を申し上げる。

A　エペソ書扉

大阪地方部監督 神學博士 ヒユ、ゼ、フオス著　松田承久
松山高吉　関三島　共譯

以弗所書註釋

完

教主降世一千九百九年
明治四十二年十二月

英國聖公會布教會社

B　エペソ書扉裏

SAINT PAUL'S
EPISTLE TO THE EPHESIANS

COMMENTARY AND NOTES

BY

HUGH JAMES FOSS, D.D.
BISHOP OF OSAKA

PUBLISHED UNDER THE AUSPICES
OF THE
SOCIETY FOR PROMOTING CHRISTIAN KNOWLEDGE

1909

C　エペソ書奥付

明治四十二年十二月十五日印刷
明治四十二年十二月二十日發行

著作者兼發行者　神戸市下山手通五丁目十五番　ヒユ、ゼ、フオス
發行所　神戸市中山手通三丁目番外五番　聖公會出版社
印刷者　神戸市元町通一丁目二十四番屋敷　菅間德次郎
印刷所　神戸市元町通一丁目二十四番屋敷　聖公會出版社

D　『新約全書』エペソ書冒頭

新約全書使徒パウロエペソ人に贈れる書

第一章　神の旨に由てイエスキリストの使徒と爲るパウロエペソにある聖徒および イエスキリストに在て信ずる者に書を贈る　願くは我儕の父なる神および主イエスキリストより恩寵と平康を受よ○　神即ち我儕の主イエスキリストの父い願くは彼キリストに由て諸の靈の恩を以て天の處に我儕を已に悉みたり　ろれ神我儕をして其前に聖く疵なからしめん爲に世基を置さりし先より我儕をキリストの中に簡び　ろの意のまゝにイエスキリストに由て我儕を已の子と爲んことを愛を以て預じめ定たり　ろの恩の榮を贊しめんため也　すなわち愛する者に在われらに賜ふ所の恩なり　ろの恩の豐なるに由て彼にあるわれる我儕ろの血により贖すなわち罪の赦を得たり　神さまゝの智慧と聰明とを子へて此恩を我儕に充しめ　我儕に其旨の奧義を意のまゝに示せり　みれ自ら定め給ひし所なり即ち期の滿るときに至りて或い天に在るひい地にある萬物をキリスト